
騎士王と破滅を呼ぶ者

死体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士王と破滅を呼ぶ者

【Nコード】

N0976Y

【作者名】

死体

【あらすじ】

これはifの物語。独りぼっちの少女を見て、少年は何を思うのか。転生した世界で、少年はあることを誓う。それは、どのような結末を迎えるのか……。簡単に言えば転生ものです！あまり更新できませんが、応援してくださいッ！！

プロローグ（前書き）

「ここは何処だ？」

by 主人公

プロローグ

「貴方は死んだので、転生してください」

「え、何それ怖い」

どうしてこうなった？

「——っと言うわけで、貴方は死にました」

「フムフム、なるほどなるほど……」

気付いたら俺は真っ白な空間にいた。へ？ 理由？ それはだ——

「……つまりあれか？ 俺はお前がやった暇潰しのために強制的にトラックに轢かれ、てか当たった？ それで、拳げ句のはてそれが別の奴にバレそうだから転生しろって言うてんのか？」

「はい、その通りです！ しかし貴方も運が無いですね。60億分の1の確率で当たってしまうなんて」

「ああ、まったくその通りだよ。………ってちょっと待て！ なに他人事みたいに言うてんの！？ お前が原因だろ！？」

ん？ なに言ってるの？ と言わんばかりに首を傾げる少女。う、ウゼー。

「つたく、お前は何様だ！」

思わず少女に向かって大人気なく叫んでしまった。しかし、少女はその言葉を待っていたとばかりに、無い胸を張り、

「私は神様ですッ！！」

そう、満面の笑みで叫んだ。

さて、そろそろ説明しようか。皆も俺たちが何を話しているかわからなさそうだし。

俺は何処にでもいる普通の高校生だった。学校に行つて、学友とたわいもない話をして、日常を少し退屈に過ごす。そんな、ごく普通の一般人だった。

それがどういふ因果なわけか、ある日いつも通り登校している俺の

元にトラックが突っ込んで来た。

——空から。

今でもあのまた不思議な光景が目には焼き付いている。太陽の光が遮られ、ふと顔を上げるとそこには空に浮かぶトラック。

……天空の車ラピュタか！ 思わず心でツツコンでしまった俺は悪くないはずだ。

んで、目の前のあり得ない光景で固まってしまった俺は、身動き一切せずそのままトラックに押し潰されてしまったんだ。

そう、そこで。本来なら俺の人生はBAD ENDで終わってしまわずだった。

だけど、奇跡が起きた。死んだはずの俺は目を覚まし、真っ白な空間にいた。そこで少女——神様に出会っちゃったんだ。

……わかる人はわかるか？ 要するに俺は、ただ今転生する直前まで来ているんだ。

以上、説明終わりッ！！

「いやー、他の神様にバレると権限が下がってしまうんですね。だから、貴方には転生させてもらいます」

「知るか、お前のことなどどうでもいい。それより俺を元の世界に戻せ」

「無・理」

「清々しいほど笑顔だなおいッ!!」

なにコイツ！ もう一度言おう。なにコイツ!!

殴りそうになるのを必死に抑えながら俺は少女を睨み付ける。一方、少女はというと――

「いやー、セイバーちゃんマジ可愛い！ 結婚して!!」

堂々と俺の目の前でマンガ本を読んでいます、はい。

てか誰だお前。最初とキャラ違いすぎるだろ。

「ねえーねえー、貴方もそう思いませんか？ セイバーちゃんホントに可愛いッ!!」

「……セイバー？ 誰だそれ？」

ふと少女が聞いてきたので首を傾げて否定する。セイバー？ 剣士か何か？

俺がそう答えると次の瞬間――

「……………え？」

何か神様がとんでもないものを見るような眼で俺を見てきた。

……おい、何だその目は。え？ 俺が悪いの？

「……え？ え？ ちょ、ちょっと待ってください。セイバーですよ？ Fateですよ？ 腹ペコ王ですよ？」

「いや、知らねえし。てか最後のなに？ 腹ペコ王ってなに？」

「……………はあ」

……あれ？ 何で俺飽きられてんの？ 何で神様超高速で指動かしてんの？ 何で怒ってんの？

「怒ってませんよ？ 怒ってなんか……ッ！！」

「絶対怒ってるよね！？　心読んで絶対怒ってるよね！？」

神様は少女みたいな笑みを浮かべているが、絶対嘘だ。だって目が笑っていないもん。

「ああそうそう。貴方が逝く世界が決まりました。名前はFate。死亡フラグいっぱいの世界ですよ。よかったですね」

「いく字が違うッ！！　しかもよくないッ！！」

絶対コイツ根に持っているだろ！？　え、なにFate？　それはいつたいたいという世界なんだ！？

「ああ、ちなみに貴方が転生するのはセイ……ごほん、あるキャラがまだ生存している時代なので、下手をするとすぐに死にますよ？」

「何言ってるんのコイツッ！？」

え？　マジで？　俺そんな時代に転生するのか？　ヤバいつて！　こんな俺じゃすぐ死んじま……そうだ！

「おい神様ッ！！　頼むから俺に一つ能力をくれ！　出来れば『めだかボックス』の——」

「あ、挙げる能力はすでに決まってるから」　じゃ、用意もすんだことだし、いつてらっしやーいッ！——」

「人の話を聞け落ちるうつつうつつうつつうつつうつつうつつッ！！」

独裁者並の我が儘を言われ、気付けば俺の足下から地面はなくなり、

——夢の始まり——（前書き）

『それでも私は……皆に笑っていて欲しいんです』

b y アルトリア

——夢の始まり——

——夢を見た。あの日、全てが変わってしまった日のことを。

広い草原の下に存在する、大きな岩。その岩に突き刺さる、一本の剣。

王を選定する黄金の剣、『カリバーン』

抜いた者は王となり、二度と人に戻ることはなくなる。ブリテンの王を決める、聖剣。

朝日に照らされて輝くその剣の前に、一人の少女がたつといた。

アルトリア・ペンドラゴン。

彼女はその金色の髪を青い布で縛ると、突き刺さっている剣の柄を掴み——

『待たれよ』

声が、聞こえてきた。

その剣の向こう側。腰を掛けるにはちょうど良い高さの岩に、ロングコートを羽織り、フードで目元を隠す一人の老人がいた。

魔法使い、マーリン。

彼女を幼少時代から支え、彼女の良き理解者。その彼が、彼女を止

めようとしている。

『その剣を抜く前に、よく考えられよ。その剣を抜くということは、人を辞めること。歳も取らず、王として生きるしかないのですぞ』

『……はい、わかっています』

彼女は微笑む。目を瞑り、昔を思い出す。

確かに、辛いことが待っているのかもしれない。けど、だけど――

『……それでも私は、皆に笑っていて欲しいんです』

そう、それだけ。それ以外の理由など、必要ない。

彼女は目を開き、後ろに振り返る。そこにいる誰か――黙ったまま、必死に何かを耐えてるような少年に向かって、微笑みながらそれを告げた。

『

』

その瞬間、一陣の風が吹く。その声は風に消され、何も聞こえない。

——けど、心はきつと……届いたのだろう。

彼女——アルトリアは前を向き、剣を握り締める。

そして——

剣を——引き抜いた——

俺の日常（前書き）

「不幸だ——ッ!！」

by レン・クラウディア

俺の日常

「……んあ？ 朝か……」

何だろうか？ とても懐かしい夢を見ていた気がする。……まあいつか、所詮夢だろう。

まだ暖かいベッドから抜け出し、閉まっていたカーテンを開く。

「……うん、憎たらしいほどいい天気だ」

雲一つない青空を見上げ、俺——レン・クラウドは呟いた。

俺——レン・クラウドが転生してから早数十年の月日が流れた。生まれたのは外国の何処かで、現代よりずっと前の時代に転生してしまったようだ。

あ？ 何でそんなことがわかるかだと？ そんなのあれだ。だって騎士だぜ？ いったい何時の時代なんだ今は。

俺は何処かの農家に生まれ、のんびりと人生を満喫していた。

………うん、でも一応特訓はしてたぞ？ 何故か押し入れにあっ

た剣を子供の頃から毎日素振りしてるし。おかげで今じゃ朝から晩まで振っても疲れなくなった。

ま、素振りしている所を子供に見られりして色々あったが、その子供とも仲良くなったがな。

んで、そいつの名前はアルトリア。

ぶっちゃけ、かなりへんな奴だった。

少女なのに男装してるし、剣振ってるし、何か湖の上に立ってるし。

……って湖の上に立つってお前人間か！？ 能力者なのか！？

そんな感じで、俺とアルトリアは剣術を鍛えたり、将来について話たりして過ごしていた。……そういえば、剣の握り方を教えてる時に後ろから見易いように抱いたら顔を真っ赤にしてたけど……気のせいだよな？

ああそうそう。そういえば、アイツの紹介を忘れてたな。

何時も通り特訓していると、ふと紫色のコートを羽織った老人がアルトリアの所にやって来た。

そいつこそ、魔法使いマーリン。

どうやらマーリンはアルトリアを護衛する任務に就いており、こっ
やって様子を見に来たそうだ。

何でも、今までは全部まかれていたらしい。……アルトリア、お前
いったい何者なんだ？ 何で護衛がお前につくんだよ。それどう
やって逃げてきた？

しかも最初会った時、凄い表情で睨まれたっけ。そうだな、例える
なら……「お前何かに娘がやれるか！」って言う向こうの親父さん
みたいな？

まあその後、アルトリアの説得を受けて何とか謝って来たが……そ
ういえば、仲直りの握手とやらをした時、何か凄い笑みを浮かべて
たな。あれは絶対イタズラを考えてる笑みだ。

んで、そんな感じでのんびり過ごしてたんだが……ある日、奇妙な
噂が流れた。

何でも、いきなり岩に突き刺さった剣が出現したらしい。しかも、
それが王を選定する剣『カリバーン』らしい。

……うん、もう俺は驚かないぞ。アルトリアが水の上に立てるよう
な世界なんだ。例えいきなり剣が現れても絶対驚かないからなッ！！

第一、俺は騎士でもないから抜けないしな。俺には関係ない！ そ
う思ってたら……

——アルトリアの野郎が、剣を抜きやがった。

……これには流石の俺でもびっくりしたわ。え？ マジで？ これ何のドツキリ？

実はアルトリアの奴、前の王、ウーサー王の隠し子だったらしい。だから王の血筋で剣が抜けたそうなんだ。

……って血筋で抜けるって何！？ お前は勇者か何かか！！

まあそんな感じでアイツが王になり、なんやかんやしていたら——

……気付いたら、俺も円卓の騎士の一人になっていた。

いや、ホントはそんなのになるつもりはなかったんだぜ？ けど何かスカウトされたり、バカにしてきた奴らを完封なきまで叩きのめしたりしていたら、気付けばアーサー王に遣える13人の一人にな

っていた。

……はあ、不幸だ。

「あー、めんどくせ……」

俺は寝間着を着替え、何時も通りの黒コートを羽織り、フードで目元まで隠した。

あ？ 鎧？ あんなの着れるか。第一なんで普段着から重い服装をしなければいけないんだ。

”コンコン” 『失礼します』

そんなことを考えていると、扉をノックされた。ああ、もうそんな時間か。

「ああ、いいぜー」

そう答えると扉が開き、外からメイドさんが入ってきた。……メイ
ドってこの時代からいたんだな。

「朝食をお持ちしました」

「おう、何時も悪いな」

「……別に、仕事なので」

そう無表情に答えるメイドさん。……俺なんか悪いことでもしたかな？

まあとりあえず、さっさと飯にするか！

「うん、今日も絶品だったな。……何故かそう言ったら変な眼で見られたけど……何でだ？」

朝食を食い終わり、食後の運動というわけで俺は宮殿の中を歩き回っていた。

……てかさ、なにこれ？ 何で周りを見渡せばイケメンしかいないんだ？ おかげで恥ずかしくて顔を出せねえ。

ん？ アイツは……。

「よお、ランスロット。今日は早いじゃねえか」

「む？ 貴方こそお早いですね、レン」

そこいたのは一人の騎士。黒髪でその美貌は数多の女性を虜するほど美しい。

湖の騎士、サー・ランスロット。

円卓の騎士最強と呼ばれる男がそこにいた。

……とりあえず、一言言いたい。

「イケメンもげろ」

「？　どうかなされましたか？」

「いや、別に……それよりどうしたんだ？　そんな刀身が磨がれてない剣なんか取り出して？」

そう、ランスロットの奴どういふ訳か剣を持って歩いてたからな。しかも自分のじゃない、稽古用の剣を。

「ああ、これはですね。少し前にガウエイン卿に誘われましてね。よかったら貴方も御一緒にしますか？」

「勘弁してくれ。お前と稽古なんて面倒なことさせるな。第一、俺がアイツのこと苦手なの知ってるだろ？」

「フフ、やはり貴方らしいですね」

そう言っただけならコロッと落ちてしまいそんな笑みを浮かべるランスロット。

まったく、マジで勘弁してくれ。ランスロットと稽古になったらガチでいかなえと瞬殺されるしな。オマケにガウエインはやたら俺に怒

つてくるし。騎士道？ 何それおいしいの？

じゃあ、とランスロットと別れると俺は宮殿の出入口に歩き出した。

「さて、久し振りにアイツらに会いに行くとするか」

俺はアイツにバレないように慎重に、迅速に進み――

「何処へ行くのですか、レン」

――即効でバレました、はい。

出入口の前に立つのは一人の王。青い服に鎧を纏い、金色に輝く髪を青い布で止め、黄金の剣を地面に突き刺して立っていた。

「……何でお前がここにいるんだ」

「貴方が逃げようとするからです」

そう言つてブスーと睨み付けるアルトリア。……いや、なんでさ。お前王様だろ？ 玉座に座つてろよ。後びっくりして門を守る兵たちが固まっちゃまってんじゃねえか。

「第一、俺はちゃんと書類出しただろうが。別に問題ない――」

「それは昨日のです。しかも貴方だけが最低限のノルマしかクリア

していません」

よって、そう言つと大きく息を吸い、

「貴方は私が今日つきつきりで書類を終わらせてもらいますッ!」

.....

.....

.....

な、なんだって——ッ!!

そりゃないぜアルトリア! 今日一日中宮殿に閉じ籠るなんてアンタは俺を殺す気か!? こうなったら……

「諦めなさい、もうじき他の騎士たちも来ます。貴方に逃げ場はありません」

「はっ! 悪いが、俺の辞書に……諦めるって文字は存在しねえ!」

俺は横で呆然としている兵士から剣を抜き取ると、アルトリアに向かって突っ込んだ。

「いいでしょう。ならば……正面から叩き伏せるのみ！」

アルトリアも地面に突き刺した剣を抜き、構える。

黄金の剣と無名の剣。二つの剣がぶつかる次の瞬間――

「……………なんてな」

「え……………？」

俺はニコリと笑い、対照的にアルトリアの表情が絶望に染まる。

その視線の先にあるのは俺の右手。そこに握られているのは――

「逃亡用666道具の一つ！ 『激辛煙り玉』」

ポフッ！ と辺りに白い煙が巻き散る。

「ごごごごほ！ め、目が開けられない！ れ、レン！ 貴方も騎士なら正々堂々と戦いなさいッ！――」

アルトリアはどうやらまともに食らっちゃったらしい。目から大量の涙を流し剣を振り回している。

え？ 俺？ 最初から目瞑ってたし息もしてなかったから無傷ですけど何か？

「ハッハッハッ！ あばよとっつあっんッ！――」

俺はカオスと化したその場から離れ、町へと走り出す。後ろから足

音が聞こえてくるし、さつさとおさらばするとしますか！

「ま、待ちなさいレン！ 帰ってきたら覚えときなさい！！」

後ろから、アルトリアの涙声が聞こえてきた……。

「あ、レンだ！ 遊んでくれよ！」

「れ、レンさん！ よければその、後でお話しでも……」

「おう坊主！ よく来たな！ ちよっくら飯でも食ってけ！！」

「あーもう、いいからどけ——ッ！！」

町に出た直後、何故か俺の周りには人が大量発生していた。

何故だ？ これでも一様フードで顔を隠してるというのに……？

「そんなのレン様を一目すればすぐ分かりますよ」

「マジで！？」

驚愕の事実には驚く俺。え？ マジで？ 今までの俺の努力はなに？

「それよりレン兄ちゃん！ 早く遊んでくれよ！」

「早く、早く！」

そう言っただけの言葉を引く子供たち。おい、止める。服が伸びるだろうが。

「まったく、はいはいわかったから。今行くから少し待て……ん？」

子供たちに引く張られるように移動しようとすると、ふと感じる視線。辺りを見回すと、一人の少女が目についた。

「……………あ」

俺と視線があつと木の後ろに隠れ、少し経つとひょっこり顔だけ出してこちらを見つめてくる。

……………ふむ。

「？ どうしたの兄ちゃん」

「あ？ 悪い、少しここで待ってくれないか？」

俺は子供たちにそう告げると、そつと木の後ろに隠れてる少女に近づく。

「よお、どうかしたか？」

「あ……………あの、えつと……………」

突然俺が現れたことに驚いているのか、少女は口をゴモゴモと動か

して焦っていた。

俺はそんな彼女に手を伸ばし、

「どうだ？ お前も一緒に遊ぶか？」

「え……」

すると少女は驚きの声をあげた。まるで誘われるとはまったく思っていない表情。

「で、でもわたし……」

「——よつと」

「きゃ、きゃあッ!？」

少女は呆然と俺を見つめる。ん？ 何をしたかって？ 肩車しただけだが？

「どうだ？」

「……うん、高い。凄い高い！」

少女は先程とは別人のように笑い、キヤーキヤーと俺の頭を掴みながら叫んだ。正直言ってるさい。

「あー！ いいなー！ 俺にもやってくれよ！」

「はいはい、また今度な。それよりも今日は何して遊ぶんだ？」

「鬼ごっこ！」

「鬼ごっこ……ですか……？」

「ああ、お前は知らなかったな。いいか？ 鬼ごっこっていつねはな——」

その日、俺は太陽が沈むまで遊んだ。

その後——

「あの……何で俺は椅子に縛られてるんでしょうか……？」

宮殿に戻った俺に待っていたのは、他の円卓の騎士で、抵抗する間もなく取り押さえられ、椅子に縛られてしまった。

ほんと、なんでさ……？

ランスロットは同情してるように苦笑し、ガウエインの奴は凄惨な形で睨んでくるし。

「よくやってくれた皆の者。礼を言う、下がってくれ」
すると、アルトリアがやって来た。

彼女の言葉に礼をすると解散していく円卓の騎士。何故かランスロツトが”頑張れ”的な笑みを浮かべてただけど……？

その前に、一言言っておかないといけないことがある。

「……なあ、一つだけ聞いていいか？ この書類、なんだ？」

そこにあつたのは大量の書類。天井にまで届きそうな書類の山が、そこにあつた。

「これは貴方の書類です。今日サボった分、寝ないでやってもらいますからね」

「……え？」

嘘、今なんて言った？ 寝ないで？ これを全部？ ……………。

「不幸だ——ッ！！」

俺の日常（後書き）

バーサーカー（第四次）めちゃくちゃカッケーエッ！！ ランスロ
ット最高ッ！！

設定

名前

レン・クラウディア

容姿

普段から黒コートを羽織り、顔をフードで隠しているため、ほとんどの人がその素顔を知らない。
ちなみにその素顔は黒目黒髪で、中々の顔立ちだが、周りが全員イケメンばかりなので、ブサイクだと思っている。イケメンもげる。

性格

基本面倒ごとが嫌い。必要最低限の仕事はするがそれ以上はサボる。それが原因でよく怒られる。
騎士なのに騎士っぽくない。卑怯。何故かカリスマ性があり、町に行くのと町民に囲まれる。後子供のなつき度が半端ない。
剣の才能がなく、努力だけで円卓の騎士の座に上り詰めた。幼なじみが王になっても態度は変わらない。
人を殺すことは嫌い、根は優しい人。

実力

剣士。武器を選ばず色々な剣を使う。本人いわく「切れ味がわるくなったから落ちてたのを拾っただけ」。使えばなんでもいい。戦うことを嫌い、決闘を申し込まれても全力で逃げようとする。けど実力はトップクラス。サー・ランスロットといい勝負らしい。何故か魔法使いマーリンに気に入られ、イヤイヤ魔法（魔術）を教わる。けど絶対使いたくない。何かム力つくから。

二つ名

- ・黒騎士
- ・黒の剣士
- ・不完全な騎士
- ・偽物の騎士
- ・黒衣の騎士

設定（後書き）

始めたばかりですみませんが、アンケートです。

主人公の二つ名は、いったいどれがいいでしょうか？ 上のヤツから選んでもいい、オリジナルでも構いません。作者が気に入ればそれにします。

期限は無期限。よろしく願います。

決闘？ 勘弁してくれ……（前書き）

「……強いんじゃない。ただ、強くなりたいだけだ」
by レン・クラウディア

決闘？ 勘弁してくれ……

——その光景は今でも覚えている。

夕焼けに照らされた漆黒の髪。

血に染まった手で剣を握み、それでも放さない腕。

彼は微笑み、血だらけの手をこちらに向け——

『俺の名前はレン。レン・クラウディア。よろしくな？ アルトリ
ア』

それが、私たちの fate（運命）の始まりだった——

「レン・クラウディア！ 今から貴様に決闘を申し込む！！」

「……………はい？」

どうしてこうなったのだろうか？ 俺——レン・クラウディアは少

し前のことを思い出していた。

今日は何時も通り無表情メイドに叩き起こされ、朝の鍛錬の後、怒られたくないから必要最低限の書類を終わらせ、アルトリアに提出しに玉座の部屋に来て――

いきなり決闘を申し込まれた。

……うん、意味がわからない。何故に？ What' t？

「……えっと、モードレッド？ 今なんて言っただんだ？」

「だから！ 私は貴様に決闘を申し込むと言っただんだ！」

そう叫ぶモードレッド。……やっぱり聞き間違いじゃなかったか。

モードレッド。

円卓の騎士の一人で、何故か普段から顔を隠しており、その素顔は謎に包まれた人物。

……てかさ、せめて食事中はとうろつぜ？ 目の前でそんな格好で食われたら、食欲無くすわ。

「……えーと、モードレッド？ 一つ聞くが何でだ？」

俺はモードレッドに問いかける。するとモードレッドは剣を俺に向け――

「貴様のような騎士の恥、王に泥を塗るだけだ！ 私が勝てば、貴

様には円卓の騎士の座から引いてもらう!」

そう、はっきりと宣戦布告した。

(……………うわ、めんどくさいな——)

俺は心の中で呟くと、深くため息を吐いた。

まったく、こういう輩は本当に面倒だ。己れは間違っただけで、ただ王の道を阻むものは容赦なく斬る。そう微塵も疑ってない者の目だ。

(……………まあ、無理もないか。俺の行動を見てたら)

仕事はサボる。卑怯、騎士道の欠片もない行為。王に尊敬を感じない行動。そして——

——ただの、農民のくせに。

そう、きっとそれなのだろう。自分以外は皆、優秀な王や貴族の息子だち。それなのに、どうして自分みたいな存在がいる。そのことを、彼らは許せないのだろう。

うんうん、と頷く過半数の騎士を見て、敵は多いな——と、どうでもいいことを考える。

……てか、この決闘に乗っても何にも俺にメリットがないよね？
てか面倒だ。

まあアルトリアなら止めるだろ、アイツ真面目だし。何てことを考えながら断ろうと口を開き――

「ほお？　なかなか面白そうではないかの？」

――突如現れた声に止められた。

こゝこの声は……！

「……マーリン？　いつ帰ってきたのだ？」

突然現れたマーリンに、アルトリアが驚きながら言った。

「いやいや、つい先ほど調査が終わって帰ってきたばかりですがな。
しかし、決闘かの？」

そう言ってニヤニヤ笑うマーリン。や、ヤバい。俺の第六感が今すぐ逃げると叫んでる。あの笑みは、間違いなく俺にトラブルを巻き込ませる気だ……！

「わ、悪いが断る――」

「王よ、ここは一つやらせてみてはどうですか？」

「む、だがしかし……」

「王として部下の力を知るにはちょうど良い機会だと思えますが？」

「なるほど、そう考えると……」

「——って説得されてらっしゃる！？」

先手を打って断ろうとした所、気付けばマーリンのクソジジイにアルトリアが説得されていた。

おいそれでいいのか王様！ アンタそれでも国を背負う王なんだからそんな簡単に言いくるまれているのか！？

「……よし、では円卓の騎士モードレッドと、円卓の騎士レン・クラウディアの決闘を認めよう」

「ハッ！ ありがたき幸セッ！」

「おい！ ちょっと待——」

「……どうしてこうなった……？」

呆然と、呪うような絶望した声で呟いた。

場所は変わって宮殿の稽古場。そこには騎士たちが見守るようにつめており、その中心に俺とモードレッドが佇んでいた。

……くそ、囲まれているから逃げられねえ……！

「いくぞ。今の内にこれからどう過ごしていくか考えておくのだなッ！」

そう言いつと、見ただけで名剣だと分かる剣を抜き取り、睨み付けて来るモードレッド。

『良いか？ 二人とも』

すると、声の上の方から聞こえてきた。チラリと横目で見ると、会場の上にある特等席から王と円卓の騎士、そしてこの事件の原因であるマーリンがいた。しかもマーリンにいたっては審判までしようとしていた。

なにやってんだ爺さん……。

『では決闘を始める前に二人が賭けたものを確認するぞ？ まず始めにモードレッド。お主が勝てばレン・クラウディアは円卓の騎士の座を脱退。それで良いかの？』

「はい、その通りです」

そう頷くモードレッド。

『では次にレン・クラウディア。お主が勝った場合、十日間の休暇

が与えられる。……本当にこれで良いのか？」

「ああ、それで構わない」

同じくそう言つて頷く俺。……ん？ あ、この約束？ これは勝負を公平にするためにお互い勝った時の条件を決める時に決めたものだ。

いや、たまにはおもいつきし休んでみたいじゃん？ 何時もみたい
にチマチマじゃなくて、こう温泉にも行ったりして豪快に休みたい。
……あ？ 誰だ何時もサボってるとかほざいた奴は。

『ふむ、よかるう。ならば両者、前へ』

「く、この騎士の恥が……最後までそのようなことを述べるか！」

モードレッドはもう殺気で人を殺せるんじゃない？ とばかりに俺を
睨みながら前へ出る。

……さてと、

「おい、そこのお前。剣を少し貸してくれねえか？」

『え？ あ、はい！！』

今の俺は丸腰。剣を一本も持っていなかった。なので、後ろにいた
黒髪の少年——騎士B君に剣を借りると、前へ歩きながら一気に鞘
から刀身を引き抜いた。

そこにあるのは無骨で何処にでもありそうな剣。とてもじゃないが、

名剣とは言えなかった。

けど——自分にはこれがいい。これくらいが、お似合いだ。

本当は自分なんか円卓の騎士にむいてない。自分は彼らみたいに、強くない。

『お前、やったじゃねーか！ あのレン様に使ってもらえるなんて何て羨ましいんだ！』

『凄いいね。武器を選ばず、全てを一流に使いこなせるんでしょう？ いつか僕もあの人みたいに……！』

『でもまずは一つのことを極めないと。話はそこからだよ。……でも、そう考えると本当にレン様って凄いいね』

後ろからそんな会話が聞こえてきた。それを聞いて思わず苦笑する。

違うと叫びたかった。自分は強くない。全てにおいて中途半端で、何一つ一流になれない才能の無い屑なのだ。

俺に——剣の才能なんか、まったくくないと言うのに。

両者が指定の位置に着き、剣を構える。

『ふむ、どうやら準備はよろしいようだの』

マーリンの声を無視し、意識を集中させていく。イメージするのは水面。そこには音など存在せず、あるのは波を気配のみ。

眼を瞑り、意識を極限にまで集中する。気配が、自分と目の前の男以外感じなくなる。

そう——まるで、自然と一体化したような、感覚。

『よし、では——始めッ！！』

「いくぞレン・クラウドアッ！ 貴様も円卓の騎士の一人だと言うのなら、その強さで証明してみせよ！！」

開始の合図と同時にモードレッドは剣を振り上げながら突っ込んできた。

……まったく、どいつもこいつも勘違いしてやがる。俺は強くない。強かったら、こんな一試合にここまで全力で挑むはずがない。

俺は——

「……強いんじゃない。ただ、強くなりたいだけだ」

瞑っていた眼が開く。剣を握り締める手に更に力がこもる。身体中に神経を張り巡らせていく。

ダッ！ と地面を強く蹴り、前に進む。敵との距離は後数歩。俺は握り締めた剣を振り上げ――

――剣に火花が散った――

決闘？ 勘弁してくれ……（後書き）

……あれ？ どうしてこうなった？

どうも、最近この小説受けが良いのか悪いのかよく分からない作者です。

実はこれ、最初の予定ではガウエインが相手になる予定だったんです。ですが、やはりランキング2位は流石にきついかなーと思いついて、変更いたしました。

まあこうすれば、フラグにもなりますしね！

さて、皆さんが言っていた主人公の矛盾については次回わかんと思っています。頑張れ主人公！ 戦え主人公！！

後マーリンは完全オリジナルキャラになってしまいました。だって……PS2持っていないんだもん！

……そういえばランキングですが、日刊ランキングを見た時はマジで驚きました。「え？ なにこれ？」と見た瞬間硬直してしまいました。

こんな読者の皆様にダメ出しを食らってしまう作者ですが、一生懸命書いていきます。

……あーあ、早く第四次聖杯戦争に入りたいなー。

強さの意義（前書き）

『——俺は強くなりたい。それを貫けるくらい、強く』

by レン・クラウディア

強さの意義

——二つの剣がぶつかり合う。

一つは完成された剣技。見るものを虜にするような、美しい剣技。

もう一つは荒々しい未完全な剣技。がさつで乱暴で、けど何処か繊細なイメージを受ける剣技。

二つの剣技が、対極する存在が、持ち主の勝利のためにただぶつかり合う——

「……凄い」

ふと、そんな呟きが聞こえた気がした。そんな細い声が響くほど、会場は静まり帰っていた。

聞こえるのは鋼と鋼がぶつかり合う音だけ。その二人の乱舞に、誰一人として声を出せず見とれていた。

そして自分——アルトリア・ペンドラゴンもその内の一人だった。

剣と剣がぶつかり合う。いや、正確にいうのならモードレッドが怒涛の攻撃を見せ、それをレンが避け、かわし、受け流す。そのの

り返しだった。

一見モードレッドがレンを押しているように見えるがそれは違う。避けるということは、攻めるよりも難しい。しかもモードレッドが使う剣は名剣。下手をすれば一撃でそこらの剣を叩き折ってしまう名剣を、レンは全てそのそこらにある剣で受け流していた。

針の穴に糸を通す、そのような集中する作業をレンはずっと繰り返していった。

凄いと思う。何時もの彼しか見ていない人なら、きっと彼を才能だけでここまで強いのだと思うだろう。

——だが、私は知っている。彼が、剣の才能なんて何一つ持っていないことを。

めんどくさがりで、人のことをすぐからかう幼なじみ。仕事もすぐサボろうとするし、王になっても何一つ接し方を変えようとしない騎士とは言えない騎士。

けど——自分は知っている。彼のたった一つの忠義を。彼のたった一つの、信念を。

「……強いんじゃない。ただ、強くなりたいだけ……か……」

彼が始まる前に呟いた言葉。この言葉は、意味を知っている者にし

か伝わらない。彼が剣を握る、たった一つの理由。

その信念がある限り、彼——レン・クラウドは、円卓の騎士（国を守る者）なのだから。

そう、あれはあの日。初めて彼の……レン・クラウドの想いを知った日のことだった——

『……どうして。どうして貴方はそこまでやるのですか？』

『あ？』

私とレンが会って数ヶ月。ある日、私は彼に聞いた。

『そこまでボロボロになって……どうして貴方は振り続けるのを止めないのですか？』

レンの手はボロボロだった。剣の振りすぎで皮は捲れ、そこから血が流れ、見るからに痛そうだった。

『うーん、どうしてって言われてもな……』

レンは古くなり血が染まった包帯を捨て、新しい包帯を手巻き付けながら、語り出した。

『……俺さ、嫌なんだよな。誰かが死ぬのを見るのが』

『……それはそうでしょう。誰でも大切な人が死ぬのは嫌ですから大切な人が死ぬ。それは誰にとっても辛く、耐えきれないものだ。そういった人々を少しでも減らすために、私たち騎士がいるのだから。』

しかしレン——農家の子は、その答えに首を横へ振った。

『違うんだよ、俺は。俺は敵とか味方とか関係なく、誰かが死ぬのは嫌なんだ』

『なッ！？ 貴方は正気でそんなことを言っているのですか！？』

その答えに私は啞然した。レンの言っていることは矛盾している。味方を守るためには敵を殺さなければならない。そうしなければ殺られるのは自分の仲間なのだから。

そのことを問いただそうとして——私は、動きを止めた。

『ああ、分かってる。分かってんだよ。そんなこと。自分が言っていることが理想論だってことは』

彼の眼。彼のその眼を見た途端、私は何も言えなくなった。

迷い、それでも前に進もうとする眼。深い悲しみと僅かな希望が写るその瞳を見て、私はその意志の強さに何も言えなくなってしまった。

『……殺すのも、殺されるのも嫌い。泣くのも、泣かれるのも嫌いだ。死んでいい命なんか一つもないし、奪われていい命なんか何処にも存在しない。敵とか味方とか、そんなもの以前に生きてんだよ、俺たちは。だから俺は、殺したくないんだ。誰一人』

彼の言葉が、心に染み込んでくる。彼の想いが、彼の信念が、私の心に刻まれる。

言っていることは全部甘い。そんなもの、戦場ではまったく通じないだろう。けど、その思いは、その信念は、決して間違えてないと思えた。

『……だから、さ——』

ビシッ！ と包帯をきつく縛り、血を止める。レンはそのまま立ち上がり、剣を再び握むと、

『——俺は強くなりたい。それを貫けるくらい、強く』

剣を左上から右下に振り下ろし、剣に付いた泥を振り払った。

その光景は、後ろから夕日が照らすその姿は、まるで……英雄のようだった。

『強ければ相手を殺さなくても倒せる。敵も、誰も殺さなくて済む』

『……そうですか。だから貴方はそこまで努力するんですね』

『まあな。めんどくさいけど、俺には剣の才能がないからな。お前らが一人で出来ることを俺は十やんなきゃいけないし』

ウフフ、アハハ、と気付けば私たちは笑い合っていた。そうか、と思う。彼の言葉を聞けて、ようやくわかった。彼がそこまで出来る謎を。

レンは最初から分かっていたのだ。自分が弱いことを、自分が何も出来ないことを。

それでも彼は諦めなかった。例えば目の前に道がなくても、それでも彼は前に進んだ。進めば、その後ろには道が出来る。ならば、もっと先に進めば答えが見つかる、そう信じて。

誰も死なせたくない——そんな、理想を胸にして……。

『……それに、さ。もう一つ、強くなりたい理由が出来ちまってな』

『え？』

突然の言葉にレンの顔を見る。しかし、夕日の日差しが彼の顔を隠しているため、彼がどんな表情をしているのか分からない。

しかし何故か、何処か照れくさそうな感じがした。

『……守りたいと思った人が出来ちまったんだよ』

『む？ それはいつたい誰ですか？』

『ああ、馬鹿で頑固者で、自己犠牲精神野郎で、けど何処か笑顔が似合う……そんな、くそつたれをな』

『??? いったい誰のことですか？ 何か特徴を言ってくれと助かるのですが……』

『……アホ毛……ッ！！ な、無しだよっぱり！ これでこの話は終了！ 終わり！ finish!』

『ま、待ってくださいレン！ そこまで言われると逆に気になってしまいます!-!』

『あーもー！ 終わりのものは終わりなんだ——ッ!-!』

レンはそう叫ぶと全速力で走り去ってしまいました。

……？ 本当にいったい誰のことなのでしょう……？

——襲いかかる斬撃を避け、かわし、受け流す。ただそれだけの動作が、永遠に感じる。

「くうッ!-?」

突然来る、死の予感。俺はすぐさま剣を横に立て——次の瞬間、捌

くことも出来ずダイレクトに振られた一撃を食らい、剣が悲鳴を上げ、体を吹き飛ばされた。

「——くそッ！」

足を地面に接触させ、擦り勢いを殺していく。体の重心を下げ、数メートル離れた所でようやく止まることが出来た。

——”ピキッ！”

「……チッ、やっちまったか……」

止まると同時に、何やら壊れた音がした。視線をずらすと、剣の間部分に少しだけひびが入っているのが見える。

くそ、やっちまったか……。まあそれもそうか。相手は名剣。その一撃を無名の剣がまともに受け止めたりしたら、ひびが入っただけでマシな方か。

「ふん、もう諦めたらどうだ？ そんな無様な剣じゃ、決闘にもなるまい」

相手——モードレッドが俺の剣を見て降参するよう促してくる。

「貴様ももう少しマシな剣を使っていれば少しは勝機があったのにな。恨むならそんな剣を選んだ自分「何か勘違いしてねえか？」……なに？」

まったく、何を言ってるんだコイツは。勝負が決した？ 誰が決めたそんなの。それに——

俺はヒビが入る剣を向け、言ってる。俺の思いを、この剣にこもってる力を。

「——テメエ程度、こんな剣で充分だって言ってるだよ」

「ッー！ 貴様……貴様——ッー！」

ついに怒りが限界を越えたのか。モードレッドは怒りに顔を染めながら、こっちに突っ込んで来た。

……よし、まずは相手を怒らせることで冷静さを失わせることに成功。

剣を持つ手が震える。先程の捌きの連続で、集中力が欠け始めている。頭の使い過ぎで、頭がクラクラする。

けど……やっと、全ての分析が終わった。

「——さあ、反撃開始と行こうか」

眼を瞑り、再度意識を集中させていく。全てのシミュレーションを頭の中に叩き込み、後はそれをイメージするだけ。

ゆっくりと眼を開く。その瞬間——世界は、時を止めた。

俺——レン・クラウディアには剣の才能がない。同じことをしても、普通の人なら二倍、才能ある騎士なら五倍の努力しなければならぬ。

いくら努力して剣がある程度振れるようになって、才能ある人には努力では越えられない壁がある。ならば、どうすれば良いか？

俺の考えたことは至って簡単。剣技だけで勝てないのなら、全てを使っ

て勝てば良い。

視覚、嗅覚、聴覚、触覚、第六感。全て利用した。

その中でも一番重要視したのは視覚、つまり——眼だった。

眼は見るだけで色んな情報を手に入れることができる。俺はそのため、幼少の頃から眼を身体と共に鍛え続けてきた。

相手の間合い、相手の癖。相手の視線によって繰り出されるパターン、それらが原因で考える相手の真相心理。…… e t c ——

それらの全てを理解すれば、それは一つのイメージとして、一つの——未来を見ることが出来る。

…… 所詮、俺にはこれぐらいしか勝てる方法がない。けど、例えばそれがどんなにカッコ悪くても…… それは——

紛れもない、勝利なのだから――

「――はぁッ!」

――俺は弱い。

モードレッドの斬撃が俺に襲いかかるが、一歩下がることでそれを見切る。

「ぐう、はッ!」

――誰かを助けることも、守ることも出来ない。

すぐさま剣を俺の右肩に向かって斬り上げるが、癖でそれを判断し、身体を背けることで避ける。

「何故だ、何故だッ!」

――だから強くなりたい。今よりも、ずっと。

剣が当たらないことに苛つき、荒々しく率直になる剣技を、相手の心理を予測して交わし続ける。

「く、これならどうだあ——ッ!—」

——気付いたら身体が動いていた。

集中力が限界まで増加する。時間が、自分の意識だけを残して止まっているかのように、ゆっくりと。

今までみたいな曖昧なイメージとは違う。細部までハッキリと予測できる、イメージ（未来）。

イメージが先に動き、それに後を追うかのように同じ動きで動き出す。

イメージがあるのなら、それに合わせればいい。俺の右手——剣を握り締めていた手はそれが分かってるかのように、少しずつ、イメージに向かって動いていた。

——少しずついい。俺は、前に進んで行きたい。

やがて俺の剣はモードレッドのイメージ……剣の柄と重なり——

「う……うおおおおおおおおおおおおおお——
ッ!—」

声が、絶叫が、音をかき消した。

音が消えてしまったんじゃないか？　そう思ってしまうほど、耳から何も聞こえない。

ただ、後ろに何かが飛び、地面に突き刺さった感覚はした。

そして――

「……別に、円卓の騎士とかはどうでもいい。けどな――」

――アイツの、隣で。

「――まだ、この座から離れるわけにはいかねえんだ」

――モードレッドの剣を斬り飛ばした俺の剣は、丸腰のモードレッドの喉元に突き付けられていた。

「――俺の勝ちだ、モードレッド」

勝敗は、決した――

強さの意義（後書き）

どうも、こんな戦闘表現ダメダメな作者です。

いやー、あれですね。この前ランキング見たとき、マジでテンパりました。あれ？ 何でこんな駄文がランキングベスト5に！？ みたいなの？

まあそれと正反対で感想はかなりのダメージを受けましたが。

後農家の皆様、作者の自分勝手な判断で書いてしまったことをこの場を借りて深く謝罪します。あんなことを書いてしまい、誠にすみませんでしたッ！！

設定で皆様に不快な思いをさせているかもしれませんが、作者も出来るだけ完成度を高めようとしているので、応援してくれると嬉しいです。

出来れば後五話、いえ四話で聖杯戦争に介入させたいと思っているので、流し読み程度で期待してください。

……ああ、批評が怖い……（（（；。旦那）））

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976y/>

騎士王と破滅を呼ぶ者

2011年11月12日00時22分発行